

発行者：「風の便り」編集委員会

生涯学習立国の条件

フォーラムレポート

を聞きながら来年5月の大会時の出版に向けて推敲を重ねて行きたい。以下はフォーラムレポートに代えて、生涯学習立国論の「序文」原稿に若干の補筆を施したものである。

1 変革の根源

最後は最も広い意味での学習と教育になることはいうまでもない。特に、生涯に亘って変化が連続する時代には、生涯に亘る継続的な学習が最も重要になることは論理的な必然なのである。それゆえ、今や、人々の生涯学習の成否が国家社会の根幹を決定するようになったのである。経済も、政治も、司法も、改革の成否は、詰まるところ、国民の理解と自覚の如何に掛っている。国民が理解しないあらゆる改革は一步も前に進む事なく、国民が自覚しない改革は確実に挫折せざるを得ないからである。生涯学習が立国の条件となる所以である。

もちろん、人間を育てるのも、その生き方を決するの

●●●●●●●●●●●●●●●●●● ● 目 次 ●●●●●●●●●●●●●●●●●●

- 生涯学習立国の条件 P 1
- 補筆「寺子屋通信」 P 6
- ふたたび英語教育の徒労について—現代学校教育における方法論と全面衝突— P 9
- Message To and From P 13
- 編集後記「一億総白痴化」から「一億総生涯学習」へ P 14

2 変化の連鎖—革新の連鎖

生涯学習の登場はそもそも「変化の連鎖」が生み出したものである。変化は連続し、変化は拡散し、変化はスピードを増しつつ次の変化を生み出す。「変化の連鎖」は、時代の最大の特徴になったのである。変化の推進力は技術革新であり、それが社会システムの革新につながり、更にふたたび、新しい社会の仕組みが技術革新を加速させる。この間、変化に適応できないものは、取り残され、必然的に陳腐化する。かくして、変化への適応が生き残る為の条件となる。そのメカニズムが生涯学習の生みの親である。

高齢化は保健医療技術の革新によってもたらされ、情報は情報技術の革新によってもたらされる。当然のことである。全ての技術革新は総体としての生産力を向上させるので、技術力の高い日本の製品は、性能も、価格も、耐久性も世界の製品に優っている。かくして、日本の製品は世界の市場で歓迎され、日本は貿易立国が可能になる。貿易立国とは世界との付き合いを意味する。それゆえ、経済も、生活も、教育も、世界の中の日本を成り立たせるためには、国際化が不可欠となる。すべての国際化は世界との交易がもたらすものであり、かつまた、世界とのいっそうの交易のためには更なる国際化

が必要となるのである。

ある分野の変化は別の分野に影響をもたらす、変化が変化を呼ぶ連鎖反応を引き起こす。それゆえ、変化はほとんどあらゆる分野において、かつての知識・技術・考え方を陳腐化する。変化は革新を要請し、変化の連鎖反応は、革新の連鎖反応を要請する。技術革新を震源とする社会変化は生活の全分野に及ぶのである。かつての制度は制度疲労を起こし、かつての役割分担は無境界化現象によって新しい役割と責任の守備範囲を決定しなおさなければならない。新しい技術も、新しい関係も、新しい仕組みも、すべて新しく学び直さない限り役には立たない。それゆえ、変化は新しい教育を必要とし、革新は絶えざる学習を要求する。日本企業はその要求に応え得たからこそ世界に通用するのである。同じことは政治にも、行政にも、教育にも、メディアにも、地方の暮らしにも、男女共同参画にも、子育て支援にも、高齢化対策にも要求されている。果たして、現行の生涯学習施策と実践はこれらの要求に応え得ているか？立国の処方箋を書く為には、生涯学習の現状診断が不可欠である。

3 変化は願望の実現

変化は必要があって起こる。変化は人間の夢と希望の実現の結果である。それゆえ、変化の総体は人間の願望の実現を反映している。もちろんどのような変化にも、副作用があり、行き過ぎがあり、変化の過程が不公平を生み、不利益を被る人々も発生する。しかし、そうしたマイナス要因に関わらず、変化を目指すエネルギーが人間の願望を原点としている以上、人間生活をよりよいものにしようとする「変化の連鎖」を止めることは出来ない。全ての変化の基本は人間自身が望んでいることだからである。

変化をより早く、より公平に、より合理的に、できれば不利

益を被るひとを説得して、その犠牲を最小限にとどめようとするのが、社会変革である。それは技術の変革であり、思想の変革であり、システムの変革である。あらゆる変革は人々の理解と活力なしには起こり得ない。かくして、生涯学習は社会変革を迅速かつスムーズに進行させる原動力として登場したのである。「学習」こそが理解の根源であり、社会的条件の変化に対する適応の手段であり、より豊かで、より人間的な「自分」への自己変革の方法だからである。かくして、生涯学習は衣食住と並んで変化の時代の必需品となったのである。

4 活力の基

生涯学習は個人の向上と幸福に関わっているが、それに優るとも劣らぬ比重で社会の活力創造に関わっている。社会の活力は、社会を構成するひとり一人の国民の活力の総体だからである。国民の活力はひとり一人の元気と健康を基盤と

し、ひとり一人の独立心、自己革新、挑戦の精神を基盤としている。国家・社会の発展方向は、発展の必要条件についての国民の自覚と理解に掛っている。

もちろん、国家社会の未来は現在育てている子どもたち

の資質と能力の如何に掛っている。その彼等がさまざまな危機に当面している。危機とは少年の「弱さ」であり、彼らが身につけた社会規範の貧困であり、自らの資質を十分に開発出来ていない実態である。学校の責任は大きく、生涯学習施策の責任も大きい。少年の危機は必然的に未来の社会的危機に繋がる。少年における「生きる力」の欠如は、早晩、社会を脆弱にし、国家を衰退させるからである。

次に、高齢化の急激な進行も大問題をもたらす。労働から引退した高齢者を放置すれば、心身の衰弱は不可避であり、必然である。労働において活用していた機能を引退と同時に休止すれば、頭も、身体も、精神もその働きは急降下する。人口の高齢化と高齢者の衰弱が同時進行すれば、医療も、介護も当然破綻する。結果的に、老人は社会のシステムを破壊し、若い世代との世代間対立を激化させる。高齢社会における地方の活力は、高齢者の活力の関数である。増え続ける高齢者が元気を失わなければ、地方も活力を維持することができる。「老い」は基本的に「衰弱と死に向かったの降下」(ボーヴァール)であり、「活力の喪失」は年老いた生物の必然である。「老い」は、当面、なんびとも止められない。それは肉体的衰えに留まらない。社会的な自立能力も衰え、精神的

な自律能力も衰える。この時、高齢者の元気は生涯スポーツや生涯学習やボランティア活動の関数である。生涯学習は元気と活力の「必需品」である。

老いもたらす衰えをソフトランディングさせることが、生涯スポーツと生涯学習の課題である。その成否は、個人の幸、不幸をわけ、高齢者の社会貢献や医療や介護を通して、社会の活力の浮沈に大きく影響する。高齢者教育の現状は明らかな失敗である。医療も、介護もこのままでは疑いなく破綻する。現代の日本を築き上げて来たタフな人々が引退と同時に一気に老衰し、衰弱している。高齢者大学や老人センターに見ると、老人の活動が、ゲートボールやグランドゴルフ、歌や踊りの娯楽、趣味、教養ざんまいに明け暮れ、残された生涯時間20年を遊びと風呂で過ごそうとしている。気楽な余生を、気尽に送って、加齢とともに老いぼれて行くだけでいいのか？労働が終わった定年後は社会に必要とされなくてもいいのか？現状の財政難が続いた時、果たして若い世代は高齢者の気尽な贅沢三昧を保障する負担を許容できるのか？高齢者の社会貢献活動が問われ、生涯学習の中身と方法が問われている。

5 「公平」の生涯学習

社会の活力の元が国民の活力である以上、国民の半分を支える女性の元気は社会の活力の半分を支えている。「女子は半天を支える」のである。社会を支える女性の元気は、男女共同参画によって実現する。この時、男女共同参画の具体化は、女性の能力の開発・活用にかかっている。女性には、従来、男性に比べて、教育の機会も、研修の機会も、就労その他の社会参画の機会も少なかった。それゆえ、女性の現状を真に変革しようとするれば、生涯学習や社会参画の実践を通して、女性自身が己の実力を向上させるしかない。女性の自立にとって生涯学習は社会参画の武器である。この武器を活用して学ばない限り女性の實力は向上しない。

一方、男女共同参画の前に立ちちはだかるのは「変わりたくない男」である。彼らの自己革新もまた、生涯学習の成果如何である。男性主導の現行システムの変革は、男性自身の学習によって意識の変革が実現しない限り決して進展しない。しかし、実際問題として、多くの男達は「公平の生涯学習」には聞く耳をもたない。かくして、「変わりたくない男」と「変わってしまった女」の衝突は長期化する。結果的に、農山漁村の嫁不

足は全く解決せず、全体社会の少子化・晩婚化も止める事は出来ない。男女の争いがこじれれば 熟年離婚や家庭内暴力も多発せざるを得ず、現にその傾向はますます強まっている。男女共同参画を阻んでいる大部分の要因は「伝統」と「しきたり」による意識の固定化である。数万年、数十万年に亘って、筋肉の力に依存して、労働と戦争を続けてきた人間社会は、筋肉の働きに劣る女性を蔑視する傾向は免れない。特に、男の腕で支えてきた農山漁村の「筋肉文化」は女性を対等とは認めない。筋肉文化が生み出した「伝統」と「しきたり」は頑強であり、男女共同参画の実現を妨げて来た象徴である。それゆえ、農山漁村は、いまだに、時代の趨勢を理解せず、女性が歴史的におかれてきた不公平・不平等の状況を打開しようとはしていない。女性を蔑視する農山漁村文化が、後継者の「嫁不足」によって徹底的に復讐された今となっても、地方の男性支配と女性の参画を認めない様々なシステムは現存する。社会はいまだ、伝統としきたりこそが女性の敵であり、「公平」の敵であるとは認識していないのである。女を参画させない伝統としきたりこそが、「筋肉文化」の最後の抵抗であり、

不公平の現代的象徴である。

対等で公平な「共同参画」の理念はあらゆる人権問題の基本原則である。それゆえ、「いつでも、どこでも、誰でも、なんでも」市民がそれぞれの選択意志によって共同参画できる社会的システムを確立することは社会の最終目標となる。言うまでもなく開かれた共同参画の原理こそは生涯学習の出発点でもある。関心と意識が人々の行動の基盤であり、生涯学習こそが関心と意識を醸成する機能である。

男女共同参画に限らず、あらゆる差別の問題を解く鍵は対等な共同参画を阻んできた「しきたり」と「伝統」の点検にある。それは「公平」の生涯学習に突き付けられた「変革の宿題」である。文化における「伝統」と「しきたり」を安易な「不易」に置き換えてはならない。歴史を見る限り、基本的に、どこの文化においても、絶対不変を主張出来る「不易」など存在する筈はないのである。

6 やり甲斐の基

① 新しい縁

元気でなければ何も出来ないが、ひとりぼっちでも何も出来ない。第一、ひとりぼっちでは物事への意欲が湧いてこない。仲間がいて、集団の励ましや賞賛があって、初めて活動のやり甲斐も生じる。交流のネットワークは意欲の基である。「社会的承認の欲求」は人間存在の基本条件である。

社会人類学者の中根千枝は、日本文化における交流のネットワークは「経験の共有」によって得られると指摘している。従来は、血縁、地縁、結社の縁（職縁）が交流の基盤であり、経験を共有する舞台であった。親族はもちろん、近隣社会の付き合い、学校のPTAや子ども会、同窓会、県人会、会社の同僚・仲間が大部分の経験を共有した。

しかし、今はこれらに「新しい縁」が加わっている。それが「生涯学習の縁」である。それはボランティア活動のような「同志の縁」であり、職業訓練や生き甲斐学習が生み出す「同学の縁」であり、趣味の活動を共有する「同好の縁」である。新しい縁は、生涯学習の選択原理が造り出した縁である。

② 21世紀の「同じ釜の飯」

高齢社会の平均寿命はあくまでも「平均」である。夫婦も、昔なじみも「とも白髪」となるまで生き延びる保障はない。それゆえ、パートナーに先立たれた孤独も、仲間が先きに逝ってしまう交流の「貧困化」もみずから工夫して切り抜けなければならない。高齢社会に生き残った者は、確実に「心の支え」が先細りし、気持の拠り所が貧困化するのである。アメリカの心理学者ベックはそれを「情緒的貧困化（Emotional Impoverishment）」と名付けている。

地縁、血縁、結社の縁は、核家族化、高齢化、国際化、選択原理の浸透などによってますます希薄化している。大部分の親はすでに成人した子どもと一緒に住むことはできない。子どもたちの地元就職はすでに不可能に近い。幸運にも地元就職が可能であったとしても、子どもたちは独立の核家族を形成する。職業上の地域間移動は今や地球規模で行なわれる。定年が過ぎて、生き残った高齢者にとって、従来の「縁」は、日常の暮らしから遠い。血縁も、地縁も、職場の縁も、具体的な交流の支えにはなりにくいのである。したがって、「心の支え」とならず、「気持の拠り所」となりにくい。それ故に、生涯学習社会、特に高齢社会は、「新しい縁」を支えに暮らす社会である。高齢者を支えるのは、生涯学習や生涯スポーツの仲間であり、ボランティアの同志の人々であり、活動の縁によって出会った新しい人間関係である。そのため、生涯学習を選択しなかった高齢者は、新しい縁に出会うことが難しい。生涯学習こそが21世紀の、なにかんづく高齢社会の「同じ釜の飯」だからである。

社会的承認の欲求は唯一仲間の存在によって満たされる。仲間に出会えない老後は意欲の基を失ってしまう。意欲が湧かなければ関心は育たない。関心のないところ新しい活動は始まらない。かくして生涯学習に巡り会わなかった高齢者は、意欲を欠き、元気を欠き、人間としての活力を欠くことになるのである。活力を失った人々は基本的に社会の負担と成らざるを得ない。

高齢者が社会の負担と化せば、社会の全体活力は急降下する。かくして、高齢社会は生涯学習を社会の必需品にしたのである。

7 「訓練された無能力」の解消

「訓練された無能力」とはヴェブレンの言葉である。技術が変わると古い技術は陳腐化する。社会的条件が変わると従来の考え方や態度は時代遅れになる。訓練された過去の能力は、変化のフィルターを通り抜けると「訓練された無能力」と化するのである。世に言う「抵抗勢力」の多くは、あたらしい状況を理解せず、あたらしい知識・技術を活用せず、今まで通りを主張するひとびとであろう。問題は訓練の有無ではない。訓練された中身が陳腐化して役に立たない、ということである。

当然、社会・経済の構造改革は多くの失業者を生み出し、多くの配置転換を必要とする。新しい職業とこれまでの労働力のミスマッチも発生する。再訓練と職種転換教育は不可欠となる。これらはすべて変化への「適応」を要請し、「適応」は当然生涯学習の重要課題である。人間の生涯に亘って、社会的諸条件が変わり続けるとすれば、人間の生涯に亘って、適応のための学習が

必要になることは理の必然であるからである。最も分かりやすい例がコンピューターである。コンピューターが使える国民とそれが使えない国民では、情報化の進展が異なる。IT講習が成功しなければ、情報の共有や伝達効率は上がらず、ビジネスにも、生活にも遅れを取る。情報機器を活用しない国民では、情報産業も栄えるはずがない。IT講習という生涯学習の成否が産業構造を変える引き金になり得るのである。技術の変化は常にシステム改革を要求し、構造改革を要求する。生涯学習が成功せず、変化を拒否する「訓練された無能力」を拡大再生産するとなれば、国際競争に勝ち目は無い。労働力の再訓練がビジネスの最大課題になることは理の当然であろう。生涯学習、生涯研修は、社会システムの進化にとっても、産業の再生にとっても、雇用の促進にとっても、不可欠の条件であることは論を待たない。

8 格差拡大の不可避性

生涯学習が生み出す最大の危機は「格差」の拡大である。特に高齢社会においては「生涯学習格差」が高齢者の明暗を分ける。生涯学習(スポーツ)を選んだ老人と選ばなかった老人とでは健康の明暗を分け、交流の機会の可能性を分ける。社会・経済の構造改革の「副作用」を被る人々にとっても、生涯学習の成否が変化に対する適応の成否を決定する。生涯学習に出会った人とそうでない人、生涯学習を選んだ人とそうでない人との格差は無限度に広がる。子どもの学校五日制も同様である。教育行政は五日制の導入を「ゆとりと充実」のスローガンをもって説明したが、スローガンが実現できるか、否かは、子どもが過ごす週末の生涯学習(スポーツ)のプログラム次第である。自由時間の増大は選択可能性の増大である。選択する者としらない者が分かれば、子ども達にも又、「生涯学習格差」は確実に広がるのである。

具体的な格差の中身は、知識格差・情報格差、健康格差、交流格差などである。結果的に、社会貢献の度合いや生き甲斐、自尊感情などにも「格差」が発生する。格差は人生の全領域に広がるのである。

「いつでも、どこでも、だれでも、なんでも」という生涯学習のスローガンは選択肢の拡大と選択の自由を前提にしている。そして「選択可能性」の拡大はかならず「格差」を発生させる。生涯スポーツや生涯学習の実践の有無は当然、本人の責任である。しかし、生涯スポーツや生涯学習を選択しなかった人々のつけは、

必ず全体社会に廻ってくる。「とじこもり」や「ボケ」や「寝たきり」の増加を予想し、社会的活力の低下を予見しながら、現在のような行政主導型の生涯学習プログラムでは、新しい学習者の発掘は出来ない。格差は拡大を続け、高齢化の先行きが思いやられる。

官が民に劣るのは、工夫と意欲である。行政主導型生涯学習施策に意欲と工夫が劣るのは評価と競争原理が欠如しているからである。宅急便も、コンビニも、IT革命もすべて「民」が先行してきた。「民」においては、情報と機会を開放すれば、必然的に評価がおこなわれ、競争原理が働く。評価と競争のあるところ、工夫も意欲も先行するのは当然である。幼稚園から大学まで、全ての公立の生涯学習関係機関には、基本的に職員評価も、事業評価も不在である。評価も競争もない「官」の事業は、安易な「親方日の丸」と化すことは不可避である。生涯学習が立国の基本条件となる現在、その機会の整備と提供を自己革新の出来ない「官」のみに任せることは極めて危険なのである。

かくして民営化が必要になるのは特殊法人や郵政三事業の問題だけではない。社会が必要とする生涯学習の大部分は、「官」と「民」との契約による運営の実験に踏み出すべき時である。最小限「公設民営」の契約による「チャーター方式」へ移行すべきである。格差の拡大を防止するためにも競争原理と第三者評価の導入による新規学習者・新規実践者の開拓は生涯学習支援の焦眉の課題である。



補筆「寺子屋通信」

いよいよ夏休みが終わる。筆者にとっては20年ぶりの寺子屋キャンプへの参加であった。キャンプは二日間とも雨に祟られて、裏番組の工夫に追われた。普段の生涯スポーツの精進にもかかわらず、子どものエネルギーについて行くのは容易ではない。雨で体育館の中に閉じ込めざるを得なかった子ども達と「ヘビ鬼」や「S 鬼」「けんけんリレー」などに興じるには筆者はいささか老い過ぎた。休憩や昼寝の時間には、疲れ果てて、たまたま子どもと一緒に体育館の床に寝た。”凄い軒でしたよ”、と担当者が呆れていた。

1 「前頭葉」の宿命

「ヘビ鬼」も、「S 鬼」も昔の遊びは、思いきり身体を使う。チームプレーにして、勝ち負けを競わせると、子ども達の瞳は闘争心に輝き、応援や嘆きや怒りの叫び声が交錯して、体育館は熱狂の渦となる。”誰々さんがけんけんの途中で足をついた”とか、”あの人はじゃんけんのあと出しをした”とか、”境界線のロープをズルしてまたいだ”とか、口をとんがらがして、抗議にくる子どもは2人や3人ではない。50人もの子どもが駆け回る体育館ではどう頑張っても細かいところまでは目が届かない。審判は受難の役割である。子どもはただひたすら勝ちたい。それゆえ、隙あらばルールをごまかす。補助の審判団をきちんと決めておかなかったので、判断のしようがない時も多い。そうなれば自分達の言い分が正しいと、ますます騒ぎたてて、さらに喧しい。

明らかに競争を通じて子ども達のエネルギーは倍加する。競争はルールや規範を教える絶好の機会である。ルール違反に付いて、「どっちも正しい」ということは通常あり得ない。勝負において「どちらも勝った」ということもあり得ない。寺子屋は人生の現実を子ども達に教えるべきだと考えている。それゆえにこそ機会の公平とルール主義が重要である。今夏の寺子屋の「テーマソング」は「手のひらを太陽に」とか「世界に一つしかない花」であったが、ゲームにのめり込んでいる子どもを見ると、「No.1」にならなくてもいいとは思っていない。絶対勝ちたいのである。まして、「Only One」であればいいというようには中々行きそうもない。負けたら床を叩いて悔しがる。この次こそ「勝つぞ!!!」

と絶叫する。

子どもの攻撃性や競争心は彼らが人間である印である。人間だけが「生存上の必要」が無くなくても、他者や他の動物を殺すと言われる。それが「前頭葉」に巣食う闘争本能；Killer's Instinct である。闘争心や競争心は、創造性などと同じく前頭葉を淵源としているのである。

学校が競争を回避し、運動会の勝ち負けに蓋をしても、人間の闘争心がなくなるわけではない。人間の前頭葉に埋め込まれた闘争本能を子ども時代に抑圧しても、それで「平和主義者」が育つわけではない。闘争本能は人間の「業」である。本気で人間の攻撃性や闘争心を除去しようとすれば、教育では手も足もでない。「ロボットミー」と呼ばれる医学上の「前頭葉摘出手術」をするしかない。人間の攻撃性は前頭葉をもった人間の宿命だからである。かつて映画評論を賑わしたジャック・ニコルソン演じる「カッコーの巣の上で」を思い出せばいい。前頭葉さえ摘出してしまえば、一切の攻撃性を封じることができる。しかし、現代、「ロボットミー」は国際法上、禁止されている、と聞いた。当然であろう。「前頭葉」を摘出するということは人間を人間でなくすることに等しいからである。かくして、攻撃性も、闘争心も又人間であることの特性と思い知るしかないのである。

運動会の勝ち負けも決めず、努力の違いを評価せず、学校や保育所の中だけで一時的に競争を排除しても、人間同士は様々な事でぶつかり、この世は競争に満ちている。容赦なく世間は勝ち負けを決める。しかし、世間を責めたと

ころで始まらない。人間がもともとそういう「生き物」なのである。それこそが、仏教の言う「業」であり、キリスト教の言う「原罪」である。子ども時代に消し去ったと思っても、抑圧された「闘争心」は、いずれどこかで、不健全に噴出する。いじめはその「噴出口」の一つと言っている。学校や保育所が「勝ち負け」の厳しさから守ってやったつもりでも、子どもは、やがて心身の準備が出来ないままに世間の厳しい評価に曝される。かくして、多くの子どものささやかな失敗が、深刻な挫折に転化する。同様に、何のこともない競争上の敗北が人生からの逃避に繋がる。不登校や引きこもりがそれである。挫折や逃避が増大しているのは、成長期の子どもを競争や評価の厳しさから「守り過ぎる」からである。人生の困難に対する「予防注射」が不十分だからである。

雨に降り込められたキャンプの裏番組は、競争を避けようとする現代の保育や学校教育の指導の大勢がいかにも不健全なものであるかを痛感させたのである。スポーツも遊びも、思いきって、競い、戦わせて”闘争本能；Killer Instinct”のエネルギーを健全、無害に発散させるべきである。健全な競争は、競争のない状態に比べて、子どもの健康のためにも、社会の安全のためにも、よほど役立つ筈だ

と改めて実感する。人間は、人と競わずに、ひたすら仲良く、平和に暮らすようには出来ていないのである。いじめのエネルギーも、少年犯罪も、抑圧された闘争本能の陰湿かつ反社会的な発現であろう。まして、ルールを身に付けず、規範を体得していない子ども達を、健全な競争や挑戦を体験しないままに社会に出すことは、ブレーキの効かない車を路上に出すようなものである。事故は必然であろう。

雨のため、一日中、室内に閉じこもった子ども達は、激しい心身の運動・消耗によってストレスを解消し、己のエネルギーを発散したのである。最後まで、立派に、普段のしつけの平衡感覚を維持したのである。今更ながら疲れを知らぬ子ども達のエネルギーのすさまじさに圧倒された。

だからこそ具体的な活動プログラムとその指導が重要なのである。活動プログラムを欠いた現状の学童保育では子どものエネルギーを引き出すことも、方向付けをすることも出来ない。時間は無為に流れ易く、子どものエネルギーは抑圧され、屈折し、欲求不満もたまり易い。心身を縦横に働かせる遊びが死に絶えた現代の課題がそこにある。

2 男女共同参画と男の子の育て方

キャンプでお借りした中学校の向いに「河川プール」がある。今回のキャンプは、遊泳の一時だけが辛うじて雨から免れた。筆者も子ども達と一緒に水に入った。ご多聞に漏れず、“恐い”とか、“冷たい”とか、“すべった”とか、“ころんだ”とか、愚図って上級生や指導者の手を焼かせる子どもがいた。1年生の男の子である。中学生のお姉さんが顔をしかめて持て余している。やはり「愚図の男」に女は惚れなだらう。昔の自分もどこかこの男の子に似ていた。何ごとにも不器用で、臆病で、新しいことに取り組むにも、取り組んだことに習熟するのに長い時間がかかった。

過日の生涯学習フォーラムで、女性の論者から、男女共同参画の理念と生物学上の男女差の特性を両立させながら子育てをする必要がある、という指摘があり、我が意を得た思いであった。この点については、大方の皆さんのご意見も一致した。筆者も女らしい女が好きで、当然、女も男らしい男が好きであろうと想定している。所詮、男女は、ホルモンからしてその働きが違ふんだと考えていた。

そこで、昔の自分を思い出して男の子に手を貸すことにした。しばらく様子を見てみると、男の子は、河川プールに興味津々である。上級生の子どもが水しぶきを上げているのを見て、なんともうらやましそうにしている。””恐いか！？”と尋ねたら、“恐くなんかないもん！”とうそぶく。”でも、“震えているぜ”、という口をトンがらかして、強がって胸を張る。思わず吹き出したが、男のホルモンの中にそういう働きがあるのである。”よし、わかった。先生と一緒にプール探検に行こう！！”私は子どもの返事も待たずに、その子を抱き上げて水の中へ進んだ。男の子は、慌てふためいて、叫び、バタつくがもはや遅い。プールの真ん中に進んでから、高く投げ上げるようにして水の中へ放り込んだ。「食わず嫌い」には時に「他律」が一番効果を発揮する。水から上がってくるところをもう一度捕まえて”なかなか筋が良いぞ！！”と褒め上げて、ふたたび放り込んだ。周りの子ども達からうらやましそうな歓声が上がった。3度目を捕まえて、“どうだもう一回行か？”と聞いたら、歓声に勇気を

得たのか、”もう1回行く！”と言う。そこで3度目を放り込んだ。すっかり水に慣れたのだろう。友だちに”面白い！！”と自慢している。男の子の「興味」と筆者による「他律」の「幸運な相関」であった。もうしめたものである。ハプニングがよほど面白そうに見えたのであろう。僕にもやって、私に

もやってと「投げ込まれ志願」の子ども達の行列が出来た。かれこれ15人ぐらいいは投げたろうか。キャンプ中は無事だったが、帰宅後、階段を這ってあがらなければならなかった。

3 「いじめ」は容赦しない！

「いじめ」は残念ながら現代の風潮である。健全な競争を抑圧すれば、子どものエネルギーは当然歪んで発現する。平和と平等をお題目のように唱えながら、子どもの「いじめ」を見過ごしにしているのもまた、現代の風潮である。子ども達は一見素直で、純真に見えるが、決してそれほど単純ではない。一つの小学校では、すでに初日の活動の中で「いじめ」と断定せざるを得ない残念な光景が目撃された。寺子屋では多少の「けんか」は黙認しても、一方的な「いじめ」は決して見過ごしにはしない。

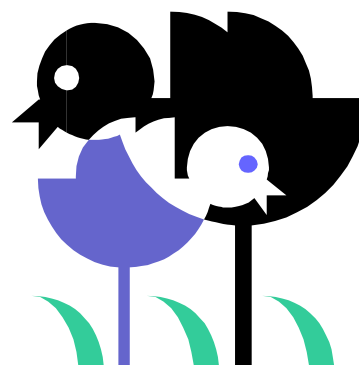
筆者もちょうどその場に來合わせて事情を聞いた。直ちに現場で指導にあたっていた者を含め、関係者を全員集めて対処方針を説明した。「次の時に同じようないじめをくり返した場合には寺子屋を除名する」「分かったか！！」と怒鳴った。子ども達は「分りました」と優柔不断に返事したので、「声が小さい！！」とふたたび怒鳴った。指導者には絶対に見逃してはならない、と厳しく釘をさした。

寺子屋は意図的に異なった年齢の子ども達から構成する「縦の集団」である。異年齢からなる子どもの「班」を作って、お互いに助け合い、背伸びしあって活動するよう工夫をしている。それがやがて来る「社会生活の予行演習」になる筈だからである。「班」の中では能力も、経験も異なる上級生と下級生が入り交じって活動する。それゆえ、子どもの「好き勝手」を放置すれば、「強いもの」が「弱いもの」を虐めるような状況が簡単に生まれてしまう。

寺子屋の厳しい指導があるからこそ、下級生は上級生に付いて行きたい一心で背伸びをして頑張る。上級生も、自分より幼い、能力も劣った下級生を、徐々に、いたわり、助けるようになって行く。年齢別に構成する学校の集団と寺子屋集団の一番の違いがここにある。昨年、寺子屋実行委員会は、1年間のパイロット事業を通して、「異年齢集団」の「助け合い」効果を十分に確認している。それゆえ、

本年度、全小学校に事業を拡大した段階でも、参加者を「学童保育」年齢の3年生までに限定する事なく、1年生から6年生まで一緒に活動出来るプログラムを工夫している。

「有志指導者」の指導の指針は、子ども達が朗唱する「寺子屋4か条の心得」の第2項に謳っている。それぞれの経験や能力にいろいろ違いはあっても「何ごととも仲良く」、「お互いに協力して」助け合う事が目標である。特定の子どもを仲間はずれにしたり、わざと辛くあたったりするような行為が見られた場合には、虐めた側の事情に関わらず、寺子屋は「虐められた子ども」の側に立つ。寺子屋は勝負に挑ませ、ルールに則った競争を奨励するが、一方的な侮辱や抑圧や仲間外しは断固認めない。「いじめ」は寺子屋の精神の対極にあるのである。「虐められた子ども」が負った傷はその子の未来の希望を失わせ、人生をさえ狂わせる事さえある。各ご家庭においても、「子どものことだから」と軽く考える事なく、重々それぞれのお子さんに「協力と助け合い」の精神を言い聞かせて頂きたい、と「寺子屋通信」第3号に強調した。果たして、「自己虫」の蔓延した現代の家族は理解するであろうか？



(6) 師弟の心理的距離を消滅させたのは、戦後教育の最大の失敗である。学校民主主義の「バカの一つ覚え」は、「友だち先生」を大量生産した。民主主義の名のもとに、社会心理学上の「師弟の距離」を解消したことは、学ぶ者の指導者に対する尊敬と憧れの基本条件を破壊したことを意味する。指導者への礼儀を確立して、師弟の心理的・社会的距離を保障する教育上の仕組みは、日本の教育風土が工夫した最良の「擬制」システムであった。指導者への尊敬と憧れがあってこそ子どもは指導者に自分を重ねて学ぶ。それが「同一視」である。尊敬する指導者だからこそ、その人のレベルに到達したいという学ぶ者の自己向

かくして「学校英語」が変えられない、ということは「学校教育」が変えられないということに通じている。

◆ 3 ◆ 「型」の指導は「体得」である ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

道理がない。「創造力」こそは「基本型」に精通した人間による「型」の破壊であり、革新である。「型」の指導は知育ではない。「型」は体験を通した「体得」である。英語を話せないのはコミュニケーションに必要な文の「型」を「体得」していないからである。

MESSAGE TO AND FROM



メッセージをありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがありましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★ 札幌市 笹森千登世 様

お盆が終わったと思ったら、夏休みの終りは速いですね。その後お身体の方はいかがでしょうか？九州では森の道ばたに気の早い薄が穂をだし、ひぐらしのこえがつつくぼうしに代わりました。月見草が道ばたに整列しています。燦々と降り注ぐ陽光の下でも季節の終りを運んでくるとことなく淋しそうな花ですね。

8月はおつぱら「豊津寺子屋」のてこ入れをし、そのかわら部屋に籠って、記念出版の編集をしました。今月のフォーラムには曲がりなりにも一冊の本の形をしたものを提出できました。

又、月末には福岡県穂波町とのご縁が廻り廻って、西日本の英語指導者に対する初めての講演をしました。当

方の公民館での英語ボランティア指導も張り切って、月末には第2回スピーチプレゼンテーションを実施しました。今月の原稿にまとめてみましたのでご笑覧ください。やがてこの身が年老いて講演の座敷がかからなくなった時、英語ボランティアが自分と世間を繋ぐさやかな窓口になるであろうという予感がしています。

休み中は、訪れる人もなく、電話もなく、郵便もなく、家人が買い物に出かけた屋下がりに孤独な編集作業を続けていると、遠い昔にどこかで聞いたように、庭のせみが妙に大きな声で降り注いで来ます。夏の終りは人生の減びを感じさせるものがあります。子ども時代、夏休みの終りがひたすら寂しかったのはそういうことを含んでいたのかも知れませんか。暑い夏でした。



お知らせ



◆ 9月のフォーラムはお休みです。ご注意下さい！！

9月は福岡県立社会教育総合センターの主催事業「子育てネットワーク」事業が行なわれます。初日17日(土)はルートークで8つの事例が発表されます。2日目18日(日)は5つの分科会に分かれて、様々な体験・情報交換を企画しています。ふるってご参加下さい。

◆ 10月は第60回生涯学習フォーラムです。

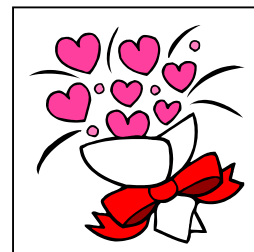
日時：平成17年10月15日(土)15時～17時、

のち「センターレストラン『そよかぜ』」にて夕食会

場所：福岡県立社会教育総合センター

事例発表：「田布施雑学大学」山口県田布施町、三瓶晴美さん(交渉中)

論文発表：「市民大学の論理と方法(仮)」、三浦清一郎



フォーラム終了後センターレストランにて「夕食会」を企画しています。ふるってご参加下さい。準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。(担当：恵良)092-947-3511まで。

編集後記 「一億総白痴化」から「一億総生涯学習」へ ワイドショーの政治学習一

テレビはかつて大宅壮一氏によって「一億総白痴化」のメディアと呼ばれた。大衆に迎合した番組を提供して視聴率を稼ぐことがコマーシャル収入に依存する民放の宿命だからである。いまでも確かに「白痴化」の傾向は変わらないが、今度の衆議院解散に基づく選挙戦報道は明らかに状況が異なる。「69号」の編集を始めた段階で選挙戦が始まった。NHK の討論番組から民放のワイドショーに至るまで、郵政改革か、年金か、首相の政治手法か、それとも総花的なマニフェストの実現か、と政治談義がかまびすしい。政治課題など見向きもしなかったワイドショーがこれほどの規模で政策や政治のあり方を論じる事はかつてなかったことであろう。小泉解散の最大の成果の一つがここにある。間違いなく首相の意志と決断が、国民の政治関心を沸騰させたのである。マスコミが「小泉劇場」と呼んだのは的を射ている。選挙に何百億円かの金がかかるそうであるが、国民の政治学習の成果を思えば安いものである。結果的に、小泉首相は誰よりも刺激的な教育者の役割を演じたのである。国民がこれほど広範囲に政治・政策に関する情報を浴びたことはなかったであろう。また、国民自身がこれほど身近に政治・政策を論じたことも前代未聞であろう。従来の政治教育や生涯学習プログラムを担当してきた公民館や学校が逆立ちしても、ワイドショーが繰り広げる生涯学習の威力にはかなわない。テレビの娯楽番組が一斉に真面目な政策課題を論じ始めた時、「一億総白痴化」のメディアは巨大な政治学習の生涯教育メディアに変貌するのである。

この事はサッカーの国際試合のテレビ中継に似ている。スポーツの国際試合やそのテレビ中継が、若者の国旗や国家に関する政治学習を劇的に促進したことに通じている。サッカーの国際試合において国家を歌い、国旗を掲げて自国のチームの応援に熱狂するサポーターは、文部科学省の積年の課題を一気に解決したのである。彼らが熱狂して連呼する”ニッポン！ニッポン！！”の掛け声は、期せずして、世界が個別の国に分かれており、現代の人間は好むと好まざるとに関わらず、それぞれの国家に所属せざるを得ないという冷厳な事実を彼らに教えたのである。

る。サッカーの国際試合やメジャーリーグに進出した日本のプロ野球選手の活躍を伝えるテレビの野球中継は、観客が直立して自国の国歌を斉唱し、国旗に敬意を表することが世界の常識であり、観客の礼儀であることを教えたのである。

比べるまでもなく、文部科学省や地方の教育委員会が長年に亘って苦勞してきた国旗や国歌についての教育的努力はサッカーや野球のテレビ中継や実際の国際試合の教育効果に全く歯が立たないのである。周知のように、教育委員会と教職員との板挟みになって、校長さんの自殺者まで出した学校における国家の斉唱や国旗の掲揚問題はまだまだ遅々として前進しない。文部科学省はとうの昔に、若者の母国認識を促進する政策上のアプローチを変更すべきであった。

現在の国旗・国歌の指導法では、教育現場において、生徒もその保護者も、教職員も対立構造に巻き込まざるを得ない。文科省は国旗・国歌をめぐる不毛なイデオロギー闘争を一時中断して、代わりに、それぞれのスポーツ連盟に教育補助金を交付してはどうか？その上で、テレビ中継が行なわれる大きな国際試合には必ず当代の人気歌手を登場させ、観客と一体となって、国旗の掲揚と国歌の斉唱を行なえばいいのである。サッカーをはじめ、スポーツの国際試合を放映するテレビは国家・国旗に関する巨大な生涯教育メディアである。

今回の選挙戦報道が日本人の政治学習を数段促進したことは明らかであろう。郵政改革に付いての賛否は別として、ワイドショーを含むあらゆるテレビ番組が伝える各党の政策論争は、改めてマスメディアの生涯学習機能の巨大さを自覚させた出来事であった。

本日、筆者のもとにもある候補者からアンケート調査を装った選挙運動のチラシが届いた。彼は今回の郵政改革法案を棄権した男である。「限られた条件・状況のもとで政治的判断を下すのが政治家の使命である。そこから逃げて棄権などする者は、議員を辞めてさっさと引退せよ！」と書いて返事を出した。優柔不断の卑怯者にならなければならないか！

『編集事務局連絡先』（代表）三浦清一郎 住所 〒811-4145 福岡県宗像市陵厳寺2丁目15-16
TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp
『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。ご希望の方は、『編集事務局連絡先』まで、90 円切手4枚、または、現金 360 円をお送りください。

尚、誠に恐縮ですが、インターネット上にお寄せいただいたご感想、ご意見にはご返事を差し上げませんので御寛容にお許し下さい。『オンライン「風の便り」』 <http://www.anotherway.jp/tayori/>